# 飛竜を束ねし転生者

フランク・ホリガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
飛竜を束ねし転生者

【Ｎコード】
Ｎ９７１８Ｘ

【作者名】
フランク・ホリガン

【あらすじ】
身勝手な神さまの要求で、半ば強制的に転生させられた一人の男
転生前に”人間になれる確率はかなり低い”と言われ、言葉通り”飛竜”になるが……

「なんでガブラスなの？」

神さまから貰った能力は不死……でも弱過ぎて活用しようがない！！

これは…主人公が群れを率いて数の暴力・質より量を地でいく物語

である

## 神さまに会って転生しろ

「起きんかいボケ！！」

グッスリと気持ち良く寝ていたオレは、物騒な怒鳴り声と腹部の激痛によりたたき起こされた

飛び起きたオレは、目に映った風景に唖然とする

オレは自分の部屋で寝ていたはずなのに、今オレがいる場所はどこまでも広がる殺風景な白い空間だ

「どこ見とんねん！！
こっち見んかい！！」

パシンと頭を勢い良くひっぱたかれ、オレの脳が揺れる
後頭部をおさえて振り返ってみると、白装束に杖を持つ、身長も胸も小さい幼女がいた

バキッ！！
「イダッ！？な、なにすんがクソガキ！！」
「殴りたかっただけや……そんでウチはクソガキやあらへんわ。」
「黙れクソガキ！！

ってかここはどこなんだよ!?」

「ウッサイやつやな……ピーピー鳴いて、女々しいやつや。」

幼女はため息をついて首をふる
その仕草にいらっとしたが、相手はタダのガキだと思い込み、ここは我慢しておく

「ここはな、ウチが魂転生させる時に使う部屋や。」

「…なに?転生?」

オレは白装束の幼女が言ったことに疑問を持つ
転生……もしかしてオレ死んだの?
いや単なる夢か?

「夢やあらへんわ。
そんで自分は死んどらんで。」

ますますわけがわからなくなるオレに、幼女はさらに続ける

「ウチ神さまやねん…面倒くさいからつっこむなや。
そいでな、ウチ…漫画とかに出て来る悪党が好きやねん。」

「色々つっこみたいけど……まあいいや。

で、悪党が好きな神さまがオレに一体なんのようだい？」

「話しが早くて助かるわ。
自分…転生してウチが好きそうな悪党になれや。」

爽やかな笑顔で話しているが、内容はとんでもなかった
幼女で訛りがあって、悪党好きな神さまなどいるだろうか？

「昔はウチ好みの悪党もいたもんや。
昔のジャンプなんて、悪党豊富やったやないか？
特に志々雄とかアシュラマンとか…。
強くてカッコイいのも好きやけど、フレイザードとかアミバ…もしくはジードみたいなモヒカンもウチは好きやで！」

嬉しそうにジャンプの歴代悪役について語り続ける自称神さま
昔の悪役をベタ褒めした後は、今の悪役はなっちゃないとか、ザコの魅力とかを語り出す…

ほうっておいたら一日中語り続けるのではないかと危惧し、オレは神さまの話しを遮る

その際「話しは最後まで聞け」と怒鳴られ、正座させられてオレは悪党の美学を叩き込まれた

神さまの話しを要約すると、こうなる…

?世紀末暴徒最高
?死亡フラグ立ちまくりな悪党が好き
?命乞いしといて、背後から襲うザコも好き
?そしてジャンプの悪役が大好き

……である

オレが今まで頭のすみに想像していた神さまとは、あまりにもかけ離れている

「ウチも神さまやなかったら、世紀末でヒャッハーって言ってみたかったわ。」

「それは神さまの発言として、どうかと思うぞ?」

「なに正義感出しとんねん。
良い人ほど早く死ぬって聞いたことあらへん?」

ここでつっこんだら面倒くさくなりそうなので、オレは素直に頷いておく

「自分素直で気に入ったわ!
そいじゃ早速転生『待てぇい!』…なんやねん。」

サラッと先に進もうとした神さまにオレは叫んで止める
今までであまりツッコミ役になったことがなかったが、ここにきてだいぶ上達した気がする…

「とりあえずこれだけ聞かせてくれ…。
なんでオレが転生させられるの？」

「んなもん決まっとるやないか。
ウチ好みの悪党育成計画のためや…自分選んだんは、自分に適正あるからや。
いやぁ、アンタ悪党の才能あんで？」

そんなこと笑顔で言われても全く嬉しくない…

「そんで転生なんやけど…。」

もう一つ、この短時間で分かったことがある
神さまは人の話しなど聞かず、自分のペースですすめるわがままなガキということだ

神さまはゴソゴソと…パソコンのようなものを出す
曰わく、やりやすいようにするため創ったらしい
というか、転生するかしないかもオレは言っていない

「ほなランダムで選ぶわ…。
……うん、モンハンやな。」

神さまが数あるうちから当てたのは、大人気狩猟アクションゲーム…

「むぅ…そういやモンハンはアイツも転生させたんやったな。
はぁ……面倒やの。」

神さまはデータ内の”恐暴竜”と書かれたフォルダの横に、チンピラという名のフォルダを作る

神さまは一通り作業を終えた後、オレに振り返ってくる

「転生した先で困らんよう、付加能力欲しいか？」

「ん～……なら病気にかからないことと、一度見たものを忘れないのと、努力でなんでも身に付ける能力を。」

「つまらんから却下や。
不死身にしたるわ。」

神さまはパソコンの画面を眺めながらオレの意見を退け、設定画面に”不死身”と入力した

抗議しようとしたが、神さまにスネを蹴られて阻止される
神さまは倒れたオレをイス代わりにし、最後の仕上げを済ませる…

「言い忘れとったけど、転生先はランダムや。
人間になれるかもしれんし、モンスターになるかもしれへんよ。
人間よりもモンスターの比率が多いから、モンスターになるのも覚悟しとけや。」

「それは神さまの力でどうにかならないのか？」

「決まった運命など御免や…なにが起きるか分からんからおもろいこともあるんよ。」

神さまはニヤリと笑い、パソコンを床に置く

さすがに虫に転生するのは可哀想だと、それだけは避けてくれたらしい

「アンタの暴れっぷりを楽しみにさせてもらうで！
ほな、ウチの強烈なデコピンで転生させたるわ。」
「は…もっと穏やかな方法で！」
「問答無用！！
狩りの世界に一名ご案内や！」

ガシッと掴まれた後に、オレの額に強烈な衝撃が襲い、オレの意識は闇の中に沈んでいった…

## 産まれろ（前書き）

この小説はあの飛竜に転生いたします！！

自分は飛竜の中で、コイツを一番多く倒した気がします！！

はい！！

## 産まれろ

暗闇の中から急速に目を醒ます…
動こうとしたら壁のようなものに頭をぶつけた
それで完全に目が醒めたが、壁の外からシャー…という蛇のような声が聞こえる
神さまに転生させられたことを思い出し、モンスターに転生する確率が高いことを思い出す

この状況では、おそらくモンスターに転生してしまったのだろう…
そう思ったのは、自分を取り囲む壁のようなもの…おそらく卵の殻だ
そして周囲からは人の声でなく、人間以外の声が聞こえるからだ

こうなったものは仕方がない…そう割り切って殻破り出ることにする

殻は簡単に割ることができ、頭突き一回で亀裂が入る

この殻を破ったら過酷な大自然の中に放り出される
そんな中でも困らぬよう、飛竜もしくは古龍に転生していて欲しかった

あの神さまは転生前に強化はしてくれなかった

それなら、リオレウスやティガレックスなどの強い飛竜に転生したい…

三発目の頭突きで殻を突き破り、外界の光りに目をくらませる
少しずつ目をなれさせていき、自分の周囲を見回して状況を確認する
自分の周りには卵がいくつもあり、どれもヒビが入っていたり、中
にはすでに頭を出している子どももいるが…

頭を出している子どもは皆キョトンと、オレを見つめている
オレも不思議に思い首を傾げる

おそらく自分は彼らと同じ種族で、同じ容姿であろう…
だが、オレを見つめる子どもたちはまるで蛇のような頭で、オレが
なれ親しまない姿をしている

オレが彼らの種族を推定していると、背後から羽ばたく音が近付い
てきた

親の姿を見れば分かるだろうと思い振り返ったが……正直かなり驚
いた

子どもと同じ蛇のような頭、細身の体としなる鞭のような尻尾に、
体の面積の半分以上を占める赤と黒の縞模様の翼…

夢であって欲しいが、頭突きした時の痛みがそれではないことを証明している…

数ある飛竜の中から、オレは最悪の種族に転生してしまった…

オレは神さまの身勝手な都合で転生させられた……

最弱の飛竜、蛇竜ガブラスに…

## 産まれろ（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております

さて、どうなることやら…

## 革命に備えろ…

神さまの気まぐれで、モンハンの世界に転生させられたオレ…
前もって人間に転生出来る確率は低いと言われていたが……
まさか最弱飛竜、ガブラスに生まれ変わるとは予想外だった

神さまから転生前に貰った力は不死身……どうしろというのだろうか？

とは思ったものの、オレは持ち前の前向きな思考で、不死身蛇竜としての人生…もとい蛇生を楽しむことにした

ガブラスといっても悪いことばかりではない
貧弱で脚も弱いが、それを補って余りある飛行能力がある

胴体の倍以上もある翼があれば、蛇竜といえども自由に大空を飛び回れる

産まれたばかりの頃は無理だったが、数ヶ月後には空を飛べるまでに成長した

蛇竜の成長は著しく、オレを含めた同世代の蛇竜たちはどんどん大きくなり、半年以上経てば大人たちと同じ大きさに成長した
その中でも、オレの成長ぶりはとても目をひくものがあった

成長期を過ぎてもオレの成長は止まらなく、身体はどんどんと大きくなっていき、最終的に普通のガブラスの二倍近い体長でようやく止まった
オレは群れで一番大きく、武器となる牙と尻尾が長かった

同世代で一番最初に翼を使って飛んだのもオレで、同世代の蛇竜たちからはカリスマ的存在となった…

産まれてから一年後…
オレや同世代の蛇竜たちは、群れを維持するための狩りに参加したが…
そこで野生動物の完全な階級社会を体感することになった…

狩りで獲た食料はすぐに自分のものにならなく、ロクに働かない年長者のもとに流れる
元人間のオレは憤りを感じたが、多勢に無勢…

群れ全体を率いる年長者と一個のオレは、象と蟻の差だった

他の蛇竜たちはなんの疑問も抱かず、蟻のように働く
むしろそういう考えを抱くオレが異端だった

最初こそ我慢していたオレだったが、やがて鬱憤は爆発した

「（もうやってられるか！
何様のつもりだ老いぼれ共めが！！）」

狩りを終えていつも通り獲物をとられた時、オレの怒りの声が古塔に響き渡った
オレが生まれた群れの蛇竜は、密林の中心にポツリと立つ、古塔に巣くっている
オレたち若い世代はその最下層に棲み、狩りが終わればそこで寝起きするのだ

「（騒がないで下さいよボス！
ヤツらに気付かれちまいます！）」

オレの横で枯れ木の枝に佇む、異様に細身のガブラスがオレを宥める
コイツの名はエディ…尊敬するギタリストと同じ名を付けてやった
その横にいる、ガブラスにしては屈強な身体つきのヤツは、アンディ
名前の由来はエディとだいたい同じだ

彼らは同世代のガブラスの中で、オレが最も信頼する蛇竜だ

エディは狡猾で頭がキレ、アンディはオレの次くらいに強い
実際、エディは群れで一番賢く、アンディとオレは群れで一番戦闘力が高い

それ故年長者に警戒され、最下層のさらに下……雨水が溜まる冷たく暗い空間に棲まされている

「（ボス、ワイはもう我慢できへんで。
あの悠長に生きてるジジイ共、ガツンとやったろやないかい！）」

いきり立つのはアンディ…どこで覚えたのか、特徴的な訛りで怒鳴る
アンディやエディがこんな思想を持ったのは、オレの教えがあったからだ
人間の知識を持つオレがエディらに決起を語ったところ、両者共賛同したのだ

「（おうよ、ヤツらが寝込んでる今、寝首かいてやろうじゃねぇか！！）」

ちなみにオレが自分に新たにつけた名は、子分たちと同じ理由で…
ヴァイキーだ

興奮して飛び立っていこうとした時、知将エディが慌ててオレたちを止める
行動を邪魔されてイライラするオレたちだったが、エディに宥められる
エディは猪突猛進気味なオレたちの引き止め役も担っており、その都度適切な言葉で鎮めてくれるのだ

例にもれず鎮められたオレたちは、エディの話しを落ち着いて聞くことにした

「（いいですかいボス、あっしらは数いてなんぼなんスから。まずは下準備が必要なんスよ。）」

「（んなもんまとめてワイらがシバいたろやないか！）」

「（話しは最後まで聞けアンディ…。
ボスは反旗の計画をあっしらにしか話していないんスよね？）」

エディの言葉に頷いてやると、エディはアンディに続いて説明する

「（同世代や他のヤツらにこれを話せば、もしかしたら仲間になるかもしれない。
同世代のヤツらはもちろん賛同するし、他もいくらか仲間になりそうなヤツは見つけた。）」

同世代の蛇竜たちはオレを尊敬しているため、エディが話せば全員仲間になる
そしてエディは、狩りの作業の何気ない　会話で、他世代でも仲間になりそうな蛇竜を見つけたのだ

「（そして、ボスが前々から関係を持つ奇面族を仲間にすれば…革命は確実に成功っス！！）」

塔に棲むのは蛇竜だけではなく、好戦的な部族の奇面族もいる
オレが彼らと付き合ってるのは、あの仮面を見てハロウィンを彷彿させるから…

奇面族とはかなり仲が良いので、共闘することは簡単だ
つまり、計画はすぐにでも発動出来る状態にあるのだ…

「（本当はあの御方の力も借りれればいいんスけど……無理っスよね？）」

「（絶っっ対に無理だ。
革命どころか、オレたちが壊滅させられるわ。）」

「（せやせや…あの御方が降臨したら、ワイらまとめて地獄行きや。）」

オレたちの言うあの御方とは……この古塔の頂点に君臨する帝王のことである
絶対に手を出してはいけない、絶対に機嫌を損ねてはいけない恐怖の帝王だ

「（まぁ、とりあえず奇面族にはオレが話す。
エディは他世代の、アンディは同世代に根回しをしとくんだ。）」

「（分かりましたぜボス！）」

「（任しとき、ワイがケツひっぱたいてでも仲間にしたるわ！！）」

オレたちはニヤリと笑い合い、それぞれの目的を達成すべく、汚水の溜まる地下から飛び立つ

歴史には綴られぬ…小さな小さな革命…

しかしそれは、生物の長く続いてきた営みを、大きく覆す出来事だった…

## 革命に備えろ…（後書き）

古塔は蛇竜から帝王と呼ばれる古龍を頂点とし、様々なモンスターが暮らしている

筆頭に、蛇竜と奇面族が挙げられる
もっとも、それ以外に目立った獣はいないが、大雷光虫は多数いる

蛇竜の規模は、１００～１５０程度

主人公の世代は６０匹前後おり、群れの多数を占めている

年長者の数が少ないのは、個体が弱いためであり、長く生きれば必然的に同世代の数は減っていく

群れを統率するのは年長者であり、下級世代は絶対服従だが…
人間の知識を持つヴァイキーが革命を起こすこととなる…

古龍の帝王ですが、設定は出来上がっております
革命が終わり次第、登場する予定であります

最後に、この小説は現時点ではまだ、恐暴竜の小説の息抜き程度です

更新は亀です…いや、カタツムリ並みです

恐暴竜が完結しましたら、こちらに本腰を入れるでしょう

その時まで…どうか記憶の端にでも…

## 革命を起こせ！！

革命が起きる前…オレたちがどんな心境で”その時”を待ち望んでいたかは、正直覚えていない
ただし”その時”は、オレもアンディたちも、高ぶる感情の赴くままに行動した…

革命のための第一の作戦、それは同世代の蛇竜を仲間に引き入れることだが…これはなんの苦労もなく達成した

アンディとオレは地下空間から上に上がり、警備の者…つまり現体制側の蛇竜を倒す
オレが頭上からその蛇竜に噛み付き、力任せに首の骨をへし折る
アンディもまた、大きな体躯をいかした体当たりをぶつけ、喉笛を喰い千切って殺す

見張りの二体を始末したあと、オレたちは耳をすませて状況を確認する

蛇竜は普段の鳴き声の他に、普通の生物には聞こえない超音波を使う
狩りの際はこの超音波で敵を感知したり、仲間同士で連携をとる
オレたちはこの特性とピット器官を活かし、暗闇での戦闘はお手のものだ

仕留めた見張りは仲間を呼んでいないようで、騒がしい様子は無い
代わりに、乱闘音を聞いた同世代の蛇竜たちが、ムクリと起き出した

「（ここは任せるぜアンディ。
オレはエディのところに行ってくる。）」

「（任しとき！）」

羽ばたいてその場を去ったヴァイキーを見送った後、アンディは蛇竜たちに振り返る
同世代たちもヴァイキーを見つめていたが、全員がアンディに向き直る

アンディもまた、ヴァイキーと同様に同世代から憧れの的だ

蛇竜たちは寝ぼけ眼を引っ込め、目をキラキラと輝かせていた

「（お前ら、今日は待ちに待った革命の日や！
ワイらの上でのんびり寝ぼけとるクソボケをぶち殺したるんや！
ボケ共に苛ついてたヤツは、ワイらに続いてボケ共ぶち殺したらんかい！！）」

大半の蛇竜は状況を理解出来ずにいたが、やがて全員が考えるのを止めた
尊敬するアンディの言葉に、疑問など持つはずもない
そしてこれは…英雄であるヴァイキーの意思であるのだから

一匹…また一匹……
それはやがて全体に広がり、蛇竜たちは戦いの雄叫びをあげる

「（ええで、ええで！！
ワイに続けや、老いぼれ共をシバいたるで！！）」

こうして革命の第一段階は達成し、アンディは同志を率いて羽ばたく
目指すは塔の上階…群れの統率者が鎮座する区画だ

ヴァイキーら若輩世代の一つ上の世代……この世代はだいたい半々の種類がいる
この封建的階級社会に賛同する者と、仕方ないと割り切って黙々と狩りに勤しむ者

ここでも若輩世代らのように、ある人物を尊敬するような節がある
この世代にはそのような者が二体おり、階級社会に賛同する者と、反発せずに黙々と任をこなす者だ

味方に引き入れるのは後者の者だ……

エディは音を立てずに舞い降りると、同じく音を立てないように、
岩の上に佇む蛇竜に近付いていく
彼女はエディを一瞬訝しげに見たが、直ぐに表情を戻した

「（エディ…だったか？
こんな早朝に一体何用だ？）」

「（急いでるものでして…すみません。
以前お話ししたことを覚えておいでですかい？）」

「（我々の主を倒すというアレか？
ハッ……無駄だよ。
ヴァイキーがいくら強大であっても、圧倒的な数の前には無力だ。）
」

「（それもアナタが反旗を翻せば覆ります。
我々の世代に加えアナタとその配下が加われば、およそ９０……群
れの半数を占めるでしょう。）」

古塔に棲みつく蛇竜の規模は１５０近い数だ
およそ三分の一を占めるヴァイキーの世代に、彼女らが加われば勝

率は大きく上がるだろう…

しかし、彼女にはそれが確実とはいえなかった
数で上回ったとはいえ、統率者たちの力は侮れない
自分を慕ってついてくる者を、無駄に命を散らすことは出来なかった…

「（絶対の忠誠を誓い、主や群れのために働いてきたアナタに…統率者たちは何をしましたか？
アナタのその清く美しい行いを嘲り、さも当然のように食にありついてるじゃないですか。

逆に、我々のボスはアナタを評価しておられます。
アナタたちが活躍する場所はここではないはず……ボスのもとで共に新しい世界を築こうじゃないですか。
平等……とまでは約束出来ませんが、今のような封建的な社会は革命と共に終わり、努力が報われる世界が来るでしょう。
どうですか……ボスの偉大で崇高な思想に賛同していただけないでしょうか？）」

エディは文字通り蛇のように、彼女の良心をつついて説得する

「（主らに怨みがないといえば嘘になる……が、我々を育ててくれた恩義もある。
主を裏切ることなど出来ない。）」

蛇竜の中では数少ない良識を持つ彼女は、ある意味一番仲間に引き入れるのが難しい存在
義の魂を持つ蛇竜……彼女ほどの忠臣なら、ヴァイキーの野望に大きく役立つ

エディはため息をつき、説得に諦めたかのように踵を返す
しかし、少し歩いた先でゆっくりと振り返る

「（お忘れなく…我々は群れの長に率いられていますが、真に仕えるは”あの御方”であるということを…。）」

彼女はエディの言葉に目を見開くと、神妙な面もちへと変わる

「（あの御方はボスを大層お気に入りのご様子……当然でしょうね、ボスはあの御方に謁見を許された唯一の存在ですから。
名目は革命ですが…これはあの御方の密命であり、あの御方は現体制の崩壊を望んでおられる。
大義名分は我らにあり……アナタ様の英断を期待しておりますよ。）
」

エディは本音と嘘を混ぜ合わせ、言葉巧みに彼女の心理を攻める
蛇竜一の忠臣である彼女は、帝王の密命であると聞き、心が大きく揺れ動いた

実をいうと、これは虚言だ

確かにヴァイキーは帝王に気に入られているが、蛇竜の群れのことなどに興味を持っていない

しかし、彼女の忠誠心を乱れさせるのには有効だ

彼女の心が革命に傾いた時、下層階に続く螺旋階段から、大勢の蛇竜が乱入してきた

「（いけぇ、寝ぼけ眼の支配者共を抹殺しろ！！）」

先頭を飛来するのは、並みの蛇竜の倍近い体躯のヴァイキー…
後にアンディとその仲間らが続き、甲高い叫びをあげる

ヴァイキーらの起こした騒ぎに、その階で寝ていた蛇竜は飛び起きる

「（えぇか、あっちは味方になるはずや！！
そっち側のボケ共をシバいたれやぁ！！）」

アンディは仲間を引き連れて、支配者側の蛇竜に襲いかかる
襲撃をうけた蛇竜は抵抗するも、寝込みの奇襲にくわえ、士気の高いアンディらにはことごとく仕留められる

もう一方の中立派は、リーダー格の彼女のもとに避難する
蛇竜たちは彼女をうかがっていたが、彼女は既に決心していた

「（今より我らが主はヴァイキーなり！！
主と帝王に血肉を捧げ……逆賊共を撃ち払うのだ！！）」

彼女の配下もまた、途方にくれていた
しかし、彼女が先頭をきって乱闘に参入したのを見て、配下たちは
雄叫びをあげて革命に参戦した

「（よくやったエディ！！
これで革命は成ったも同然……アイツにも名をくれてやらねぇとな。
）」

「（左様ですな…彼女は知勇兼備の優れた存在です。
革命が成功したあかつきには、彼女も幹部に加えましょう。）」
「（よしやってみろ。
アンディ、上階に突っ込むぞ！
仲間かき集めてついて来いや！）」

「（いよいよかい！
待ってろやボケ共！）」

オレとアンディは仲間を連れ、次なる階層へと向かうべく、螺旋階
段に進行する

進んだ階層の先には、騒ぎを聞きつけた支配者たちが、群れを率いて待ち構えていた
勢いにのったオレたちはそのまま激突、血と毒が飛び交う激しい乱闘に発展する

若輩世代の士気は高かったが、古参世代は実力を発揮して互角の戦いをみせる

後になって反乱に加わった蛇竜も参戦したが、古参世代は更に奮戦
……お互いに多数の死傷者を出す

「（鬱陶しいんやボケが！
黙ってやられんかい…！）」

アンディの屈強な体躯から放たれる体当たりが炸裂する
一度に数体を吹き飛ばしたが、命を奪うまでには至らず、吹っ飛んだ先で敵は立ち上がる

「（遠慮しねぇでもっとやっちまえ！！）」

オレは鞭のような尻尾で敵の頭蓋を壊し、喉に噛み付いて殺していた
蛇竜にしては恵まれた体躯で圧倒するオレだったが…余裕が油断につながってしまった…

突如現れた敵のボス…つまり現体制の支配者から体当たりを受け、
壁に叩きつけられる
更に運が無いことに、脆くなっていた壁が崩れて、大岩がオレの頭
を押し潰した…

グシャ…という嫌な音がなり、おびただしい血が流れる

「（愚か者め、身の程をわきまえぬ小僧共が！
生きてここから返すな！）」

「（……痛ってぇなコラ…！
頭潰れちまったじゃねえか！）」

「（んなっ！？）」

大岩から頭を引き抜いて立ち上がったオレに、蛇竜の長は驚愕した
神さまに貰った不死身の能力……これを知るのはエディとアンディ
のみ
なので、敵味方のほとんどが立ち上がったオレを見て固まっていた
潰されようが、千切られようが、真っ二つにされようが……たとえ
頭を斬り落とされてもオレは死なない
ただし残念なことに、痛覚は無視出来ない…

考えて欲しい…頭を潰されたり斬り落とされるなど、即死級のダメージを一々味わわねばならない苦痛を…

完全にブチ切れたオレは、脳髄と目玉を垂らしながら特攻…それに合わせてアンディも動き出す

アンディは素早く群れ長を捕まえて地面に叩き付け、崖から仰向けに群れ長の首のみを出させる

「（ま、待て！）」
「（誰が待つかボケ！
ボスやったれや！！）」

オレは宙で一回転し、長く強靭な尻尾に遠心力を加え、群れ長の首めがけ振り落とす

首の骨が折れる鈍い音がなり、群れ長は絶命……アンディに蹴落とされて塔の下へと落下した

「キー！キキー！キキィ！！」

その時、塔の上階から鉈を振り回しながら奇面族の集団が駆けつけ

てくる
奇面族の増援は、長を討ちとられて混乱する蛇竜に襲いかかり、地面に引きずり下ろして容赦なく頸をはねとばす
数分もしない間にそこは血の海と化し……塔の崖からは大量の血が流れ落ちる

「（ワハハハハ！！
革命は成功や！！）」

真っ先に勝利の雄叫びをあげるアンディは、背に奇面族を乗せて嬉しそうに飛び回る
仲間たちもまた、群れ長による理不尽な支配体制が終わったことに歓喜した

「（ボス、喜ばないんですかい？）」

「（読みは外れるもんだな…こっちもだいぶ被害をくっちまったぜ。）」

最後の激戦によりおよそ９０いたのが、半数にまで減ってしまった
怪我の後遺症で命を落とす者のことも考えれば、規模は３０にまで減少するだろう

当初１５０いた蛇竜の群れが、今では五分の一になってしまった…

「（ええ…想定外の事態っス。
ですがご安心を……先ほど下層にて、ヤツらが遺した、孵化間近の
卵が数十個ありました。
地道に規模を大きくしていきましょう……それとボス、これを。）」

エディがくわえてもって来たのは、一枚の純白な布
これはオレとエディ、アンディで人間の村から盗んできたものだ
革命を達成するこの日まで……オレたちで大切に管理していた

純白の布を地面に広げ、生き残った仲間を集める

「（大きな犠牲をはらったが…革命は達成した。
皆…オレについて来い、そして、新しい世界と強大な群団を一緒に
創るんだ。）」

オレは自分の翼に噛みつき、引きちぎって純白の布に鮮血をたらす

「（この革命で命を落とした同志を集めろ。
生者と死者問わず、この布にその血を垂らすんだ。）」

蛇竜たちは頷いて、革命で散った仲間の血を回収し、己の血と一緒

に布に垂らす
布はあっという間に血で真っ赤に染まり、立てた時には血が滴り落ちていた

「（以後この血盟旗がオレたちの象徴だ！
この血盟旗と帝王のもとに、オレたちはかつてない繁栄を目指すぞ！
オレたちは蛇竜血盟群団だ！）」

## 革命を起こせ！！（後書き）

シリアスもここまで…後は基本的におふざけ……かな？

主人公
名はヴァイキー
ヴァイカートではない

特徴
不死身
ドス級
実力はドスイーオスくらい
毒の威力は毒怪鳥並み

知将：エディ
ヴァンヘイレンではない

特徴
頭がちょっと良い
細身
貧弱
狡賢いチンピラ

猛将：アンディ
デリスではない

特徴
筋肉質
体当たりが得意
実力はドスゲネポスくらい
脳筋バカ、しぶとい
モチーフはニケ

帝王（謎の古龍）

特徴

おそらく
〃　短気
〃　ワガママ
〃　無敵
〃　作中最強
おそらくコイツは擬人化する…

ってな感じのメンバーですけど、蛇竜のどっちかはそのうち勝手に死にます（笑）
だってガブラスですから…

さてさて……何故恐暴竜より執筆が進むのだ？
更新間隔が長いから？

むむ……今回の話しでエディが説得していた、蛇竜の女の子……名前を募集したいです

彼女は主人公の一歳年上、みんなの姉御です

ただし主人公に惚れる予定なし、ヒロインではありませんし、いつ退場するかも分かりません

なので……こう…軽く思い浮かんだ名前をいただけたらと思います

ちなみに、ヒロインは既に決まっております

## 新世代を孵化させろ（前書き）

キャラの名はケティに決まりました！！

名無しさん、ありがとうございました

## 新世代を孵化させろ

最終的な蛇竜の頭数は三十四頭……エディの予測通り、怪我が後遺症となって命を落とす者がたくさんいた

かつて古塔の蛇竜は同種族で上位の規模にあったが、今では最下位の規模にまで減少……

古塔は他の群れから付け狙われるようになり、奇面族との共闘で、かろうじて縄張りを防衛していた…

今日もまた、オレとアンディが縄張り内に侵入してきた小型肉食獣を撃退してきた

小型肉食獣の侵入は前からあったが、組織力が低下した今では、その全てに対処出来ていない

そして必然的に、自分たちの縄張りも縮小し、今では古塔とその周囲のみの縄張りとなってしまった

しかし焦りは禁物…オレたちは少しずつ、かつての繁栄を取り戻すべく努力した

群れを維持するにあたり、オレは二つの軍団を決めて、蛇竜たちを適材適所配置した

一つは群れを維持するため狩りをする、いわば食料調達部隊
これは命を落とす危険が一番高いので、実力がある選りすぐりの者を選抜し、オレとアンディが担当している

二つめは、食料調達部隊が外に出ている間、縄張りを見張る警備部隊だ
これも命を落とす危険があるが、残った蛇竜のほとんどがこれにあたる
部隊長には、革命後新幹部として迎えた一歳年上の女の子…ケティを配置した
ケティは面倒見がよく、他の蛇竜からも慕われているので、オレは安心して留守を任せられる

側近の一人のエディは知略に長けているが、戦闘力が低いために、留守中のオレに代わって群れを指揮している
もう一つ部隊を編成したかったが、必要数が足りないので、エディと相談の上見送り…

大きく分けてこの二つだが…実際は数が少ないために、調達組が警備の役割をしたり、警備組が調達をしたりと…決められた役割を果たせていないのが現状だ

といっても、腐肉食の蛇竜はあまり食料事情に困ることはない
多めに調達して残ってしまっても、よほどドロドロに腐りきってなければ、問題はない
オレは腐った肉を食べることに抵抗を持っていたが、蛇竜は味覚が

鈍いので、匂いに慣れた今では何の問題もなしに食べられる

数日前に調達した食料がまだあったが、オレたちは今日、奮発して新鮮な食料を調達してきた
草食獣の他に、彼らの巣に忍び込んで卵をとってきた
草食竜の卵は栄養満天…オレたちの中では卵は、とても貴重な食料だった

危険な場所に出向いて卵を調達してきたのには理由がある

ケティの予測では、今日が孵化日なのだという
そう、古塔に新たな世代の蛇竜が誕生するのだ……

「（もう生まれたんかい！？
卵調達してきたで！！
コイツ食えばあっという間にデカくなるわ！！）」

「（シーッ…静かにしてなさい、アンディ。）」

ケティに戒められ、アンディは少しへこたれるが、すぐに表情を変えて巣を覗き込んだ

そこにオレを含む、他の蛇竜たちが飛んでくる
オレや幹部らは卵を囲むように見つめ、他の蛇竜たちは枯れ木や岩場に止まり、静かに見守っている
「（お、おいアンディ。
いつになったら生まれるんだ？）」
「（ワ、ワイも分からへんがな。
頭えぇんやし、エディ知ってんとちゃうんかい？）」
動きのない卵に、オレとアンディはかなり戸惑う
エディも同様に、ソワソワとその瞬間を待っている
「（アナタたち…もうちょっと落ち着きなさい。）」
「（せやけどケティの姐さん……ワイらこういうの初めてなんやで？
ワイもう…不安すぎて心臓バクバクやねん。）」
生まれて一年目のオレたちは、孵化を見届けるのは初めてだ
唯一、年上のケティは一度見たことがあるため落ち着きがある
「（生まれる前はこんなものよ……アナタたちも生まれる前は静かすぎて、孵化失敗したのかと思ったわ。
それが今ではこんな元気な子になったんだから、驚きよね。）」

誕生時の話しをされて、オレたちは顔を見合わせて苦笑いした
どうもケティ姉さんには、いろいろな意味でかないそうにない…

そう油断していると…コツンッ…という小さな音が鳴る

オレたちが慌てて卵に振り向くと、いくつかの卵が小刻みに揺れ動いていた
その現象はやがて全ての卵に広がり、最初に動いた卵には小さなヒビが入った

歓喜の声をあげそうになったが、懸命に卵から出ようとするその姿に、オレは目を奪われた
蛇竜といえど、生き物の誕生というものは美しい……ふと横を見てみると、アンディやエディもまた感動していた

そして最初の子どもが、甲高い可愛い産声をあげた

その時にようやく歓声が巻き起こり、オレたちも笑顔を浮かべた

「（おっ…この子ボスを見てまっせ。
いやはや、しかも女の子やでボス…親父さんに見られとんとちゃいますか？）」

「（そこはお前…お兄さんだろ。

しかし…可愛いなぁ。）」

一番最初に産まれた蛇竜の女の子は、卵の殻を頭にかぶり、つぶらな瞳で見つめてきている

よく観察しようと顔を近づけると、女の子は驚いたのか、卵の殻に隠れてしまう
しばらくすると、頭をゆっくりと出してきて、やはり興味深くオレを見つめてくる

もう一度顔を近づけてみると、今度は隠れず、女の子も身を乗り出してきた
女の子はオレの頭にちょこんと乗り、楽しそうな声を出した

そうしている間にも、卵は次々と孵っていき、たくさんの元気な産声があがる
幹部以外の蛇竜らも卵の周りに集まり、一緒になって喜びあったのだが…

一つだけ…無傷の卵があった

革命時、激戦は卵にまで被害をもたらした
乱闘の最中に潰されたり、巣から落ちて粉々になったり……様々な要因で孵らない場合もあるかもしれない

孵らない卵に気付いたのは少数だが、それにかまわず孵った子を祝福する

ただアンディは…そっとその卵に近寄り、優しく鼻先でつついた

「（遅れたってえぇ…頑張るんや。
世の中は広いで…お前も無事に産まれて元気に育って、ワイらと一緒に羽ばたくんや。）」

オレとケティもアンディとその卵に気付き、ちょっと様子を見る
アンディは卵を撫でたり、何か囁きかけ……まるで親のような目で卵を見つめていた

しかし卵は動く気配は無かった

オレは頭に乗った女の子をケティに預け、アンディに諦めるよう言おうとしたが……アンディの表情はパッと明るくなった

「（よっしゃ！頑張れもう少しや！
全力で割ったれや！）」

卵に小さく入ったヒビは徐々に深くなり、アンディの声援に応えるように、中の子どもは精一杯殻から出ようとする

「（もう少しや…もう少し……よっしゃー！！）」

子どもは力を振り絞って殻を突き破る
出て来たのは、なんと白色の蛇竜だった

普通とは違うその子どもに蛇竜らは驚いていたが、アンディは気にせず大いに喜んだ
オレとエディも白色の蛇竜には驚いていたが、アンディの喜びように笑顔になった

こうして残された卵三十個余り全てが孵化することができた

しばらく子育てで全員が忙しくなりそうだが、この日は、新たな生命の息吹を全員で祝福した…

## 新世代を孵化させろ（後書き）

恐暴竜同様…
主人公に妹キャラが出来てしまいました

といっても、やはりヒロインではありません…

ただし最後にアンディが孵化を見守った、白い蛇竜はアンディのヒロインです

これは蛇竜の亜種ですかね？
アンディのための、特別な物語も用意しております

ムム…またお名前を募集してしまいそうです

私のネーミングセンスの無さを恨むばかり…

## 不死身は辛いよ—帝王に謁見しろ（前書き）

帝王というよりは、皇女？

## 不死身は辛いよ—帝王に謁見しろ

朝起きたら新たに産まれた蛇竜の世話、それを終えたら狩りに出掛けて獲物を仕留める
帰還したらその肉を子どもたちに与え、残った肉を食べる
その後は塔の縄張りをパトロールし、合間にはやはり子どもたちの世話をする…
それが、最近の警備部隊の…ひいてはケティの日程だ

「（もう、アナタたちも手伝いなさいよ！！）」

外から帰還して子どもの世話をしていたケティが、サボって遊んでいるオレとアンディに、ついに鬱憤を吐き出した

「（なんやいきなり、役目ならしっかりやっとるやないか。）」

「（そうだそうだ、もっと言ってやれ！）」

オレとアンディは、地面を転がしていた小岩から目を離し、抗議するケティに対峙する
といってもまともに対応する気はなく、むしろもっとからかって楽しむつもりだ

「（ワイは食料調達部隊としての役目を終えたから、こうやって遊んどるんや。）」

「（だから、その時間を子育てに使いなさいよ！）」

「（ほれほれ、んなデカい声で叫んどると子どもたちが怯えるで？）」

アンディの言葉にハッとして、ケティは慌てて子どもたちをあやすケティは恨めしげにオレたちを睨んだが、オレとアンディは笑いをこらえるので必死だった

ケティには申し訳ないが、生まれて一年しか経っていないオレたちは、まだ遊び盛りの質の悪いクソ餓鬼だ
もちろん与えられた役目はこなすが、それ以外はこうして気の向くままに遊び尽くすのだ

「（…っといいてぇとこだけど、可哀想だから手伝ってやるよ。）」

「（可哀想やからな！）」

ようやく手伝う意思示したオレたちにホッとしていたが、オレとアンディの浮かべた笑顔を見て、ケティは嫌な予感を持つのだった

そしてその嫌な予感は的中する

「（さぁさぁ子どもたち、一緒に遊んでやるからな！）」

オレとアンディが子どもたちの前に来ると、子どもたちは嬉しそうにはしゃぐ
面倒を見るのはいつもケティだが、はっきりいって、子どもたちはオレたちの方に懐いている

元気な子ども、やかましい子ども、素直な子ども…どんな子どもも可愛いものだ
そんな中、子どもたちの奥には、ひっそりと佇む白い蛇竜がいた

「（ほらチビスケ、お前も前に来いや。
面白いこと起きるで？）」
「（う…あの…ボクは…。）」
「（ええから来いや。）」

遠慮がちな白い蛇竜の首根っこを掴み、最前列にまで引っ張ってくる
この女の子は他と比べて静かな蛇竜で、その白い身体とあいまって子どもたちの中で浮いている
しょっちゅう会いに来るアンディと以外は、ちゃんと話せる蛇竜はいなかった…

「（久しぶりだなチビスケども！
ケティ姉さんはおっかなかったろ？）」
「（なっ、ヴァイキー！
そんなことはないよな！？」

ケティは猛抗議するが、どこか不安なのか、子どもたちをチラチラ見ている

「（まあいいか…さて今日は何して遊ぼうかな？
あっ……鬼ごっこするか！）」
「（それは止めろ！！）」

すでに遅く、オレの提案した遊びに子どもたちはさらにはしゃぎだした
ここでケティが阻止しようものなら、信用ががた落ちになるだろうかといって、阻止されるつもりもない

「（鬼はケティ姐さんや！
それみんな逃げろー！）」

アンディのかけ声で子どもたちは一斉に飛び出し、四方八方へと散らばった

「（覚えてろよお前たち！）」
ケティは悔しそうに歯ぎしりし、子どもたちを追いかけていった
「（ケティお姉ちゃん、ワタシお空飛べるよ！）」
「（危ないから止めて！！）」
塔の端でぴょんぴょんと跳ぶ子どもを、ケティは慌てて追いかける
間一髪捕まえたが、それを見ていた他の子どもが真似をする

その忙しいケティの姿を、オレとアンディは大爆笑して見ていた
そこへ、もう一人の相棒エディが、神妙な面もちでやって来た

「（ボス、なにサボってるんすか。
はやく仕事しないと怒られますよ？）」
「（おいおいお前もかよ……たまには遊ばせろや。）」
ケティに言われたことをエディにもいわれ、うんざりしていたオレだったが、逆にエディに怪訝な表情を向けられた

「（たまにって…いつも遊んでるじゃないすか。
それより、はやくしないとあの御方に殺されますよ？）」
「（あの御方…？
もしかして…てっぺんの？）」

塔の上を指し示すと、エディは呆れたように頷く

「（貢ぎ物は用意しましたから、あの御方を怒らせる前に早く行って下さいよ。）」

淡々と指示をしてくるエディに、オレは珍しく慌てふためく

「（なんでオレが行くようなんだよ！！
前々から思ってたけど、他のヤツにやらせろよ！）」
「（ボスが不死身だからっすよ…ボスの代わりに貢ぎ物を持って行った蛇竜が、八つ裂きになって帰ってきたのお忘れですかい？
分かったら早く行って下さい…待たせて皆殺しになったらかないませんから。）」

助けを求めようと振り返ったが、アンディの姿はない
話しを聞いている時に、どうやら逃げ去ったらしい
観念したオレは、深いため息をついてエディを睨みつける
エディは申し訳なさそうに頭を下げ、サッサと羽ばたいていってし

まった

古塔の頂上には、全知全能の帝王が座す…
小さい時に群れの大人から教わったことだが、オレは信じていなかった……貢ぎ物を届ける役に選ばれるまで

貢ぎ物は外でとってきた肉の他に、珍しいモノや帝王お気に入りの、所謂”龍秘宝”が献上される

今日の貢ぎ物は、集めた龍秘宝と厳選された特上の肉だ
オレは龍秘宝を小袋にいれ、肉と一緒に塔の最上階へと持っていく

途中奇面族もいたが、哀れみの目でオレを眺めていた…彼らもオレの役目を理解しているのだ

塔の最上階に出たが、何の姿もない
オレは貢ぎ物を置いてそこらを探し回ったが、やはり何もない

「（うぅん…なんだいねぇじゃねぇかよ。
荷物置いて、とっとと帰るか。）」

貢ぎ物を中心に置いて帰ろうとした時、頭にとてつもない衝撃が襲い、床に思い切り叩き付けられる

「（妾に挨拶も無しに帰ろうなどと、いい度胸ではないか…のう、ヴァイキー？）」

「（うぎぃ……い、痛いですよ、ナナちゃん。）」

今オレは青い美しいたてがみと王冠のような、縦方向に伸びる形状の角が特徴的な龍に踏みつけられている

彼女こそが古塔の覇者であり、帝王、炎妃と呼び畏れられる”ナナ・テスカトリ”だ
唯一オレだけ、彼女をナナちゃんと呼ぶが…

「（ナナちゃんがいなかったから…る、留守かと思いました…。）」

「（そなたはいつになったら分かるのじゃ？
妾の姿が無かったら地の果て…いや地獄の底……いやいや、宇宙の果てまで探すのじゃ！！）」

ナナちゃんはオレをひきずりあげ、もう一度ひっぱたく
ひっぱたくとは優しい表現かもしれない……地面に叩き付けられて
重傷を負うのだから、叩き潰すの方が正しい
「（んな…無茶な…。）」

いっそ死ねれば楽なのだが、オレは不死身なためにいちいち痛い目
見なければならない……かといって反撃しようにも、ナナちゃんは
超強い

それこそ、ラージャンやテオでさえもボコボコにしてしまう、手の
つけられない恐ろしい古龍なのだ

「（そなた失礼なことを考えおったな？）」

「（いえいえそんなことは…。）」
「（問答無用じゃ！！）」
「（ギャアッ！！）」

こうしてオレの考えてることを読んで、思い切り殴るのだ
もっとも…何も考えてなくても殴る
その場合は”何も考えぬから殴られるのじゃ”だそうだ…

「（そなた…ずいぶん妄をほったらかしにしてくれたな。
そればかりか、妄の塔を穢らわしい血で汚しおって。）」

ナナちゃんが言っているのは、最近起きた革命のことだろう
その間貢ぎ物は献上できず、塔もたくさんの血で汚してしまった…
…つまり、かなりお怒りだ

「（いえこれには理由が…。）」
「（ほう…聞かせてもらおうではないか？）」

翼を踏みつけられ逃げられない…下手な嘘はつかず正直に答えなければ、また痛い目をみる

「（あのですね……前にいたリーダーたちの身勝手な行動に反発し、仲間を集めて…。）」

「（ええい、ハッキリと申してみよ！！
生半可な理想や思想など聞きとうない、そなたが革命を起こした本当の理由は何なのじゃ！？）」

「（は……本当の理由？）」

オレはわけがわからず、床に押さえつけられながら戸惑う
オレが今言おうとしたのは嘘じゃないし、周囲にも公言したことだ

「（そうじゃ、そなたも男としてこの世に生をうければ、一度は夢見たものであろう？）」

「（…んなもん知らないですよ！
あとはせいぜい、リーダーの面が気に入らないからやったとか、自分が一番になりたいとかしか浮かばないですよ！）」

ナナちゃんは厳しい目つきでオレを見下ろしていたが、やがて不敵に笑い、拘束を解いた

「（持っておるではないか。
そうでなければ、妾の許嫁たる存在ではない。）」

「（一体なんなんですか？
…それより許嫁ってなんです？）」

「（妾が決めたのじゃ。
そなたが妾に相応しい男になるまで、そなたは忠実な配下として腕を磨くがよい。）」

叩き潰された頭が痛くてよく分からないが、ナナちゃんは大事なことを勝手に決めた…それはなんとなく理解出来た

「（だから許嫁ってなんですか？
何が起きてるんですか？）」

「（何度も恥ずかしいことを聞き返すでない！
黙って頷けば良いのじゃ！）」

もう一度打撃を脳天からくらい、頭が叩き潰される
不死身だから死なないが、これ以上痛みを味わえば廃人になってしまいそうだ……

オレが痛みで悶え苦しんでいる間、ナナちゃんは粉塵を撒き散らし、牙を打ち鳴らして爆発させる
爆発が生んだ煙が風に吹かれて消えると、一瞬、月光を浴びて煌めく青く長い髪が見えた

煙が完全に消え去る頃には、黒灰色のマントで全身をくまなく覆った人型のみが佇む

その人型はゆっくりとオレに近寄ると、足で小突く

「何時まで苦しんでおる。
痛い目みとうなかったら、サッサと立つのじゃ。」

「（人型になるなら最初からなって下さいよ。
その方が痛くないんですから！）」

そんな抗議をしていると、ナナちゃんは細長い槍を一本取り出し眉間に向ける
慌てて口を閉ざすと、ナナちゃんは満足したように頷く
そしてオレの尻尾を掴んで塔の端まで行き、石の上に座った

そこで目に入ったのは、小さな小瓶に入ったドロドロとした銀色の液体だ
ナナちゃんはオレの視線に気付き、小瓶を手にして傾ける

「ドキドキノコと妾特性の薬品、それに色々混ぜ合わせたものじゃ。モンスターを人型にさせる薬として開発したものじゃが……飲んでみるか？」

「（遠慮しときます。）」

かなり興味はあったが、あんな得体のしれない液体は自分が飲みたくはない
オレが断るとナナちゃんは明らかに肩を落とし、ため息をついて小瓶を戻す

「さて妾はもう寝る。そなたはもう帰ってよい…明日また来るがよい。」

ナナちゃんは一つ欠伸をかくと、寝支度を整える

「なんじゃ…まだ何か用か？」

「（いや…マントなんかかぶってないで、素顔を出してれば可愛いと思ってました。）」

「…っっ！？
く、下らん戯れ言を申すでない！
さ…さ、さっさと帰れぇ！！）」

ナナちゃんが突然動揺して石を投げつけてきたので、オレは大慌てでそこを飛び出した

どうでもいいが…ぶつけられた石が物凄く痛い…

## 不死身は辛いよ—帝王に謁見しろ（後書き）

ナナ・テスカトリ
通称：ナナちゃん

神さまの次にこの世界で偉い、三体の選ばれた管理者の一体
その力で擬人化するが、なかなか素顔はさらさず、ずっと黒装束
（イメージは指輪物語のナズグル）
他の管理者とは仲がとてつもなく悪い

古塔を拠点に色々な場所を支配し、そこに住むモンスターを使役する恐怖の女王様
永いこと生きているが、毎日を退屈に生きてきた

そんな中、叩いても簡単に壊れない主人公に興味を持ち、さらに自分のわがままをきちんと聞いてくれる主人公に好意を持っている
ただし高すぎるプライドと意地が邪魔し、なかなか素直にならないそればかりか、主人公を自分に釣り合わせようと、特訓と称してボコボコにしている

…ってなかんじのツンデレっぽいキャラです

キャラのモデルがあったんですが、思い出せません

この小説はシリアスにはあまりしたくないので、おふざけが入るでしょう

なので、ナナちゃんは擬人化します（笑）

そのうち、ナナちゃんの特性秘薬で蛇竜たちは酷い擬人化をするでしょう

ナナちゃんの追加設定が出ましたら、そのたびに後書きに残していきたいです

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9718x/

飛竜を束ねし転生者

2011年11月26日16時45分発行